

ロシア語ロシア文学研究 32 (2000)

## ロシア貴族の家庭教育 — 18世紀後半における外国人家庭教師を中心に —

小野寺 歌子

### はじめに

18世紀は、ピョートル一世改革の産物である貴族 (dvorjanstvo) が、支配階級として指導的な役割を果たした時代であった。その貴族階級にとって、主要な教育形態の一つが家庭教育であった。支配階級の中心的な教育形態として、家庭教育は国家による教育政策のコントロールを受けつつも、基本的にはその自律性を維持していた。

貴族の家庭教育、とくにその主たる担い手であった外国人家庭教師の教育実態については、これまで制度史や教育思想史中心の教育史研究において、関心が寄せられることは少なかった。<sup>1</sup> こうした中、ロシア史家 V.O. クリュチェフスキーはその大著『ロシア史講話』で、ロシア貴族の私的教育に言及している。また、貴族文化研究の枠内では Ju.M. ロートマン、女性史・家族史サイドからは N.R. プシュカリヨーヴァの研究がある。

クリュチェフスキーは、外国人家庭教師を 18世紀貴族家庭教育の主たる担い手とした上で、その性格の変容を指摘している。すなわち、18世紀前半の外国人家庭教師は、「理髪師」など教育関係以外の者を含み、思想に欠けた「不適格な輸入教育者」であったが、18世紀後半には「自由思想家」へと変貌した。外国人家庭教師の教育実態について、クリュチェフスキーは全く触れていないが、18世紀後半の自由主義者による教育が、ロシア貴族に精神的・知的影響を与えたことを重く見ている。<sup>2</sup>

またロートマンは貴族女性の教育に関して、スマーリヌイ女学院やパンシオンに言及しながらも、家庭教育を女子教育形態の最も流布した典型として捉えている。そして外国人家庭教師による教育が外国語の日常会話訓練や行儀作法、才芸などに限定され、表面的であったと判断している。とはいっても外国語の習得が、その後の外国の文学や文化に接する可能性を広げたことを指摘している。<sup>3</sup>

さらにプシュカリヨーヴァは、18世紀後半以降の貴族女子家庭教育が大きな成果をあげたと主張している。家庭教育を受けた女性はのちに母親となり、

小野寺歌子

今度はみずから子どもの教育に携わるようになった、と。<sup>4</sup>

こうした研究を踏まえて、本稿では18世紀後半を中心に、外国人家庭教師による家庭教育の実態とロシア貴族文化に与えた影響を考察する。以下、第一節では18世紀のロシアの貴族社会と外国人家庭教師が登場した教育政策的、貴族文化的背景を概観する。つづく第二節では、外国人家庭教師の雇用事情と教育実態を具体的にみていく。その上で第三節では、外国人による家庭教育がロシア貴族文化に与えた影響と成果という視点から総括してみたい。

本稿で史料として主に依拠するのは、①外国人家庭教師から教育を受けた貴族の回想録や覚え書き、日記、書簡などの記録、②外国人家庭教師に関する同時代の論考、そして③外国人家庭教師が登場する文学作品である。

18-19世紀前半の回想録に関するA.G.タルタコフスキイの最新研究によれば、ロシアでは18世紀初頭に回想録が文学の一ジャンルとして成立したが、その目的はもっぱら子どもや家族、子孫のための記録に限定されていた。さらに19世紀—特にロシア社会に大きな衝撃を与えた1812年—以降、回想録は社会評論的性格を帯びていく。またこの頃から回想録は、プーシキンやヴァーゼムスキーなどにより、歴史史料として注目されるようになる。こうした性格の変容プロセスをおさえた上で、タルタコフスキイは回想録を「人生経験や歴史的記憶、そしてロシア人の数世代にわたる個人的意識の形成を表現するもの」と位置づけ、その史料的価値を高く評価している。<sup>5</sup>

とはいってM.ラエフは、家庭教師と、教育を受ける側である貴族子弟や両親との間に信頼関係が確立されず、それゆえ文学作品や回想録においても、外国人など家庭教師の質の低さが強調される傾向があると主張している。<sup>6</sup>こうした指摘を踏まえて、史料を利用する際には、回想録や日記の著者自身の主観的判断よりも、客観的事実を重視する必要があるだろう。

## 1. 貴族家庭教育の普及と外国人家庭教師

18世紀は、ヨーロッパ社会において教育の世紀といわれるよう、ロシアにおいてもまた、教育改革の時代であった。ピョートル一世は、それまで聖職者階級によって独占されていた教育を国家の管轄に移し、航海学校（創設1701年）や海軍兵学校（同1715年）など、武官養成を目的とした各種専門教育機関を設立した。これら教育機関は富国強兵の立場から、農民や農奴を除くあらゆる身分に門戸が開放されていた。貴族に対しては、国家勤務者を育成す

## ロシア貴族の家庭教育

るという国家的利益から、勤務義務と同時に就学義務を課した。さらに、貴族が家庭教育や海外留学などの私的教育に固執し、子弟の就学を拒否した場合、勤務忌避者とみなし、厳罰に処した。

こうした教育政策への貴族の反発や抵抗は強く、その結果、目立った成果を上げることはできなかった。貴族にとって、子弟の教育は私的領域であるという認識が強かったのである。また、1722年の官位等級表の制定と同様に、専門教育機関では貴族の身分的特権が意味を成さなかつたことにもよる。

ピョートル一世の教育政策はその死後、後継者たちによって、徐々に貴族側の利益や要望を受け入れる形で修正される。まず1731年には最初の貴族幼年学校が設立される。この学校は貴族の一部のみを対象とし、卒業者には将校からの勤務を認める特権を付与した。<sup>7</sup> 以後、同様の「閉鎖的」特権学校が相次いで設立されるとともに、就学義務が緩和され、私的教育が公認される。家庭教育はもはや勤務忌避ではなく、学校教育とともに貴族の一教育形態として普及していくことになる。

以上の動向は、男性を対象としたものであったが、18世紀後半には、女子教育への関心が高まっていく。エカテリーナ二世治世における西欧啓蒙思想の浸透を背景に、良妻賢母を育成するという目的から女子の学校教育と家庭教育が徐々に普及する。とくに家庭教育は18世紀後半以降、男性の就学機会の拡大に伴い、男子家庭教育が学校入学のための準備教育的性格を帯びていったのとは対照的に、学校教育がペテルブルグなど局地的にみられたにすぎない女子の場合、家庭教育は最も主要な教育形態として位置づけられ、19世紀以降もその大きな意義を持ち続けることになったのである。

こうした貴族教育においては、外国語や外国文化に関する教育が一般的となり、外国人がその担い手となった。その背景として、第一にピョートル以降進展した、西・中ヨーロッパ諸国との政治的・経済的関係の強化があげられる。ヨーロッパ諸国からロシアへのヒトの移動も大きくなり、そうした中で教育の担い手である外国人教師の数も増加したと思われる。たとえば18世紀末ペテルブルグの人口はおよそ22万人に達し、そのうち3万5千人が外国籍であった。国別ではドイツ人が23,612人と最も多く、ついでフランス人4,000人、スウェーデン人2,360人、イギリス人900人であった。<sup>8</sup> これら外国籍住民の職業は外交官や政府関係者、技術者、学者、建築家、軍人、商業従事者、そして家庭教師を含む教育関係者であった。ペテルブルグに関するI. ゲオルギーの詳細な記述では、在住フランス人の職業の一つとして家庭教師をあげている。<sup>9</sup>

小野寺歌子

またロシア帝国自体も、エカテリーナ二世時代のポーランド分割等などにより隣接するヨーロッパ地域を編入し、帝国内にロシア人以外の民族を組み入れた。

第二に、西欧化政策の進展とともにヨーロッパ文化、特にフランス文化の影響が、貴族の教育プランに決定的な作用を及ぼした。クリュチュフスキイによれば、18世紀中葉以降、ロシア貴族は国家勤務が免除される一方で、従来のすべての特権を保持しつつ、新たな権利を獲得していった。その経済基盤は依然として農奴制によって支えられており、貴族は「完全に無為な階層」となった。勤務から解放された貴族は外国文化、嗜好や流行、衣装、行儀作法、そしてとくに演劇への関心を高めていく。このことが、ヨーロッパ的教養の必要度を高め、貴族教育に決定的な影響を及ぼした。<sup>10</sup>

さらに、西欧啓蒙思想の影響は測り知れない。エカテリーナ二世はディドロやヴォルテールらと個人的な交流をもっていたが、彼らの著作をロシアに紹介する役割も果たした。貴族は、ヨーロッパの先進的な思想や文化を、時代に後れず理解することを必要と感じた。こうした教養の獲得手段として外国語を重視した貴族は、外国人の家庭教師を雇用するようになったのである。

## 2. 外国人家庭教師の雇用と教育の実態

外国人家庭教師の雇用と教育内容に関する史料は、きわめて限られている。ここでは、外国人家庭教師から教育を受けた貴族の回想録をもとに、その実態を大まかに把握したい。

教育を担った家庭教師の経歴やその雇用パターン、そして教育内容にもとづき、史料を次の二つに類型化することができる。第一のタイプは、知人の紹介等を通じて、専門知識を有する経験豊富な教師を海外から呼び寄せたケースである。とくにそれは、経済的余裕のある、名門貴族にあてはまる。たとえばアレクサンドル・P・ヴォロンツォフ（1741-1805）はペテルブルグに生まれ、のちにイギリス大使、元老院議員、および商務大臣を務めたが、少年期に、当時副宰相であった伯父ミハイルの計らいにより、ベルリンで教育者として高い評価を受けていたドイツ人女性家庭教師（*gouvernantka*）ルイノーとヴェルガーからフランス語を学んでいる。父親が子どもたちのためにオランダから取り寄せた豊富な蔵書と、週に二度フランス喜劇を観劇する家庭環境もあって、ヴォロンツォフは5-6才から読書欲を示し、ヴォルテールやラシーヌ、コルネイユ、ボアローなどのフランス文学に親しんでいる。また、フランス語の他に

## ロシア貴族の家庭教育

ロシア語の読み書きの教育も行われていた。<sup>11</sup>

また宮廷に近く、ウラルに鉱山冶金業の工場を所有していたことでも知られる名門ストローガノフ家の場合、父親が海外滞在中に外国人家庭教師を捜し、面談の上で雇用契約を交わしている。以下、ここで雇用された教師フランス人ジルベール・ロム（1750-95）の伝記をみてみよう。ロムは優れた數学者であり、高度の専門知識を有する者と判断することができるだろう。また後に、フランス革命期におけるジャコバン派の山岳党員として知られる人物である。彼に関する記録には、外国人家庭教師の雇用について詳しい記述がある。1774年、ロムはパリのゴロフキン伯爵家で家庭教師を務めていたが、同家でストローガノフ伯爵と出会い、その一人息子の家庭教師を依頼される。1774年5月に、ストローガノフ伯爵とロムの間で契約書が交わされた。その内容はつきの6項目にわたっていた（以下、1ルイ金貨=20 フラン、1エキュ=3 フラン、1フランス・リーブル=1 フランである）。

①教育は、両親とロム氏の間であらかじめ厳格に考え、決定された計画に従っておこなわれる。教育科目と教授法が取り決められる。勉強時間を決め、性格形成を促すあらゆることに、特別の注意が払われる。いったんこれらを検討した後には、双方は、合意に基づいた決定を変えてはいけない。

②最初の3年間は、ロム氏は報酬として年100 ルイ金貨を受け取る。その後は、教育終了まで、すなわち被養育者が満18才に達するまで年1000 エキュずつ受け取る。

③ストローガノフ伯爵ならびに相続人は、ロム氏に対し、終身年金の代わりに、3年ごとに8000 フランス・リーブルを支払う義務を負う。もし仮にロム氏が中途でやめざるを得ない場合には、この8000 リーブルのうちから、勤務時間に相当する額が支払われる。

④教育終了後、もしロム氏が勤務を続け、被養育者とともに旅行に出る場合には、双方は新しい取り決めを結ぶことになる。

⑤衣服を含め、ロム氏はストローガノフ伯爵の完全な扶養のもとに置かれる。被養育者の使用人が、ロム氏にも仕える。

⑥いかなる理由にもかかわらずロム氏にはパリまでの帰国費用が支払われる。家庭教育はまず、7才までパリで育った子弟がロシア語を全く知らなかつたという事情により、ロシア語学習から着手された。ロムはこれに同席し、自らロシア語を修得している。ロシア語の教師が誰であったのか、明らかではない。これを経た後、『ブルターク英雄伝』やストローガノフ伯爵がロシア語の翻訳

## 小野寺歌子

に携わったマルモンテル『ヴェリサリー』などの講読が行われている。ロムは、これらの書物が君主や祖国への愛情を培い、不幸の中にあっても魂の高潔さと強い精神力を作る上で大きな役割を果たしたと回想している。數学者であったロムが、ストローガノフ伯爵子弟に数学の手ほどきをしたのかどうかについては触れていない。おそらく契約書第1項目にあるように、ロムによる教育は、フランス語を基礎とした情操教育に重きを置いたものであったようである。<sup>12</sup>

これに対して第二のタイプは、外国から家庭教師を呼び寄せるのではなく、ロシア在住の外国人の中から求めるケースである。この場合、教育の水準も低くなる傾向にあり、地元在住の、教育者以外の外国人がせいぜい外国語の読み書きを教えることもあった。その事情として、特に地方貴族の場合、経済的余裕が小さくなるとともに、担い手となる外国人教育者そのものが不足していたことがあげられる。

たとえばオレンブルグで、農奴500人を所有する地主貴族の第九子として生まれたM.S.ニコレヴァ（1806-78）は、年の離れた兄姉たちが受けた、18世紀末の教育について回想録に綴っている。それによると、両親はモスクワで子どもたちの家庭教師を雇用し、所領に連れてきている。その多くは、フランス革命後、ロシアに溢れていたフランス移民であったという。<sup>13</sup>

ただし、このニコレフ家のように農奴500人を所有する貴族は経済的に恵まれた方であり、地方の貴族下層の場合、さらに厳しい条件に置かれたとも思われる。<sup>14</sup> そうした18世紀半ばにおける地方の貴族下層の事例として、以下のボーロトフ家やデルジャーヴィン家を位置付けることが可能であろう。

まず、トゥーラ県生まれの農学者であり、膨大な回想録を著したA.T.ボーロトフ（1738-1833）の場合をみてみよう。ボーロトフ家は、16世紀にさかのぼる古い伝統を持っていたが、「外国人家庭教師を雇用するほど」裕福ではなかった。ボーロトフの教育は、6歳の時、友人とともに老ウクライナ人のもとへロシア語の読み書きを習いに通ったことから始まる。その後、地方連隊長の父親とともに、ボーロトフはエストニアに転居する。9歳になると、父親は息子の将来のため、ドイツ語と算数を学ばせることを決意した。ボーロトフによれば、1740年代にはドイツ人やフランス人の教師は少なく、また住み込みの家庭教師を雇用するのは高額なために、父親は連隊に所属するドイツ人下士官ミラーを雇った。なお、教師の報酬については全く触れていない。

ボーロトフによれば、連隊勤務のドイツ人士官の多くはリーフラントやエストラントの貧しい貴族の出身で、その多くは学問がなかった。ミラーは商人の

## ロシア貴族の家庭教育

生まれであったが、「学問が無く、自己中心的で乱暴な性格」であった。ミラーの教育実績について、ボーロトフは、ドイツ語の読み書きと算数の基礎力はついたとはいえ、ドイツ語会話を教えることはできず、暗唱用単語帳だけで苦しめた、と回想している。

なお、ボーロトフは、ミラーから1年間教育を受けた後、隣人のクールラント貴族の家に預けられ、そこで雇われていたザクセン出身の家庭教師から無償でドイツ語・フランス語・絵画を学ぶ。さらに11歳から1年間、ペテルブルグのパンションでフランス語や地理などを修めた。<sup>15</sup>

また、やや特異な例として、カザンの貧しい貴族に生まれた詩人G.R.デルジャーヴィン（1743-1816）の体験がある。デルジャーヴィンは七歳の時に、他に教師がないという理由から、同じような境遇の貴族子弟とともに、カザンに流刑中のドイツ人からドイツ語を習っている。この囚人はろくに文法も知らず、ただひたすら単語を暗唱することを強い、頻繁に子どもに体罰を与える乱暴な人物であった、とデルジャーヴィンは回想している。<sup>16</sup>

### 3. 外国人家庭教育の効果および影響

では、以上のような外国人による家庭教育は、貴族の文化的側面にどのような効果と影響を与えたのだろうか。まず第一に、外国人による家庭教育は、ロシア貴族がヨーロッパ文化と直接接触する大きな機会となった。19世紀末のロシア女性史家V.O.ミフネヴィチは、18世紀のフランス人家庭教師の成果について、「教え子を特別な知識で豊かにすることはなかったかもしれない。けれども、少なくともフランス語を教えることによりヨーロッパの学問や文学の宝庫に親しませ、多少なりともロシアの子どもたちを、自国で身につけた文化的習慣や人文学的理解の中で養育した」と判断している。<sup>17</sup>

とはいえ、外国人による家庭教育の普及は、同時に教育者として不適格な外国人による教育が横行し、不十分な成果をもたらすことになった。実際、教育関係者以外の外国人による家庭教育は、18世紀後半を通じて最も主要な社会問題とされた。フォンヴィージンの『親がかり』（1782）は、教育者として不適格な外国人教師ばかりでなく、地主貴族の無教養と粗暴さを痛烈に風刺している。ここで描かれたドイツ人家庭教師は、もともと御者を生業としていたが、失業し、困窮して家庭教師になった人物である。彼はモスクワでプロスタコフ家と6年の契約を結び、地方に赴く。プロスタコフ家は、警察署にまで契

## 小野寺歌子

約の事実を届け出でてあるという。彼の報酬は、他のロシア人教師たちよりも高額で、3ヶ月ごとに先払いを受け取っていた。プロスタコワ夫人は、家庭教師の出自や教育的技量など全く頓着しない。もっともその教養の有無を検討出来るほどの教養が、彼女には全く欠落しているのだが。外国人を家庭教師に雇った、という事実だけで彼女は十分満足している。

こうした状況は、元老院議員であり、フリーメーソンとしても知られる I.V. ロプーヒン（1756-1816）の回想でも窺える。ロプーヒンの両親は、外国語を含まない「古い時代の教育」を受けていたため、「十分な配慮」をもって子どもに教育を与えることができなかった。そしてその結果、自分の教育については、ロシア語の読み書きを家の使用人が、フランス語を「文法を全く知らない」フランス人家庭教師が、そしてドイツ語を「ドイツ語を嫌悪している」ドイツ人家庭教師が担当することになった、とロプーヒンは判断している。<sup>18</sup>

第二に、19世紀ヨーロッパ貴族の比較研究において D. リーヴェンが主張するように、ロシア貴族がヨーロッパについて広範な言語・文化の教育を受けたことは、自国の言語・文化を認識する上でも大きな意味を持った。<sup>19</sup> その際、リーヴェン自身は主として男子学校教育を念頭に議論しているが、家庭教育が同様の役割を果たしたことは間違いない。

前節でも触れたヴォロンツォフは、外国の言語・文化を偏愛し、母国の言語・文化を蔑視する風潮に警鐘を鳴らしている。「ペテルブルグやモスクワの住人で、自らを教養人であるとみなしている人々は、子どもがフランス語を覚えるように、外国人に囲まれているように気を配り、高額なダンスや音楽の教師を雇っている。しかし母国語は教えない。従って、このすばらしい高額な教育は、われわれの存在と密接な関係にある母国に対して無知、無関心、さらに軽蔑さえもたらしている。それは外国、特にフランスの風習に関するあらゆることに愛着を抱かせる」。そしてヴォロンツォフ自身は、「当時、教育科目からはずされていたロシア語の学習をおろそかにしなかった」ことから、こうした偏重を回避できたのである、と。<sup>20</sup> とはいっても、ここで考えたいのはヴォロンツォフが母国の言語・文化への愛着を意識する背景となった家庭教育体験である。ヴォロンツォフ自身は、ロシア語教育をあげているが、前節でみたような外国人による家庭教育がその意識形成の基盤となつたのではないだろうか。

## ロシア貴族の家庭教育

## おわりに

以上のように、18世紀後半にはヨーロッパ諸国との関係強化や外国人の増加、女子をも含めた教育に対する意識の向上、そしてヨーロッパ文化への関心の高まりを背景に、外国人教師による家庭教育が貴族において普及した。

この時代の家庭教育の事例からは、家庭教育の担い手が雇用側の経済状況に応じて、専門的知識や経験を持つ海外在住の外国人から、ロシア国内の外国人教師、そして地方連帯勤務のドイツ人下士官やフランス人移民まで、多様であったことが確認される。外国人家庭教師の質的多様性に対応して、その教育内容と成果にも大きな差があった。ヴォロンツォフ家やストローガノフ家のように、専門的知識や経験のある外国人家庭教師による家庭教育は、外国語習得にとどまらず、ヨーロッパの文学や思想、古典に親しませ、子どもの世界観を豊かにした。また史料からは、家庭教育が厳密な契約書に基づき行われていた状況が窺われる。これに対して、教育関係者以外の外国人による家庭教育は、外国語の読み書きの基礎に終始した。

こうした外国人による家庭教育は、その成果が不十分であったにせよ、ロシア貴族がヨーロッパ文化と直接接触する大きな機会となった。また外国の言語・文化を偏愛し、母国の言語・文化を蔑視する心理を生み出しつつも、同時にヨーロッパについて広範な言語・文化の教育を受けることにより、自国の言語・文化を認識する手がかりを与えたといえよう。

さて19世紀、特に1812年以降、愛国心の高まりがみられる中で、こうした外国人教師による家庭教育はどのような変容を見せるのだろうか。女子における家庭教育の発展、学校教育との関係、家庭教育の場となる家族の構造や親族関係を踏まえつつ、この問題をロシア文化史の枠内から考察することが、今後の課題となるであろう。

(おのでら うたこ・京都大学大学院)

## 注

<sup>1</sup> ロシア貴族身分は、世襲貴族と一代貴族に大別されるが、本稿では世襲貴族を考察の対象とする。なお、本稿で検討する「外国人」を厳密に定義することは困難であるが、ここでは主として西・中ヨーロッパの言語（英語、ドイツ語、フランス語など）を母語とし、ロシア帝国以外の出身者だけではなく、本人ないしはその祖先がロシアに帰

## 小野寺歌子

化した者も指す。また場合により、18世紀におけるロシア帝国の領土的拡大の結果、帝国臣民となった者も含む。

- <sup>2</sup> В·О·クリュチェフスキー『ロシア史講話』5、八重樫喬任訳、恒文社、1983、190-220頁。
- <sup>3</sup> Лотман Ю. М. Беседы о русской культуре. Быт и традиции русского дворянства (XVIII-начало XIX века). СПб., 1994. С.75-88. 邦訳：ユーリー・ミハイロヴィチ・ロートマン『ロシア貴族』桑野隆・望月哲男・渡辺雅司訳、筑摩書房、1997。
- <sup>4</sup> Пушкирева Н. Л. Частная жизнь русской женщины: невеста, жена, любовница (X-начало XIX в.). М., 1997. С.208-220. また近年の研究では、B.N. ミローノフがロシア貴族の家族構造をみる立場から、P.R. ルーズヴェルトが所領生活における子ども期を検討する立場から、家庭教育について簡単に触れている（Миронов Б. Н. Социальная история России. СПб., 1999. Т.1. С.258-261; Roosevelt, Priscilla R. Life on the Russian Country Estate: A Social and Cultural History. New Haven and London, 1995. P.181）。
- <sup>5</sup> Тартаковский А. Г. 1) Русская мемуаристика XVIII-первой половины XIX в. М., 1991. С.220, 221; 2) Русская мемуаристика и историческое сознание XIX века. М., 1997. С.5, 6.
- <sup>6</sup> Raeff, Marc. Origins of the Russian Intelligentsia: The Eighteenth-Century Nobility. New York and London, 1966. P.126.
- <sup>7</sup> 貴族幼年学校やリツェイ、法科学校への入学は世襲貴族のうち、称号を有する家門、1785年の特權許可状法施行までに貴族身分として100年以上経過したことを証明可能な家門の子弟にのみ許された。詳細は、Дворянские роды Российской империи. СПб., 1993. Т.1. С.21; Миронов Б. Н. Социальная история России. С.85, 86 を参照。
- <sup>8</sup> Очерки истории Ленинграда. М.;Л., 1951. Т.1. С.111, 112.
- <sup>9</sup> Георги И. Описание российско-императорского столичного города Санкт-Петербурга и достопамятностей в окрестностях оного, с планом. СПб., 1794 (Репринт. изд. 1996). С. 146. ここでは、家庭教師を含む外国人教育関係者の総数および職種別内数について立ち入ることはできない。私立寄宿学校（パンシオン）の状況を大まかに示すにとどまる。『ソ連邦諸民族の学校・教育思想史概略』によれば、1750年代の国民学校設立委員会調査では、ペテルブルグにパンシオンが数校確認された。その後、80年の調査では、パンシオンの数は23校に増加した。これらパンシオンの経営者はすべてドイツ人かフランス人であり、教師も72人中52人が外国人で、ロシア人は20人にすぎなかった。このように、外国人教師の優勢が確認される（Очерки истории школы и педагогической мысли народов СССР. XVIII-первая половина XIX в. М., 1973. С.48, 140）。
- <sup>10</sup> クリュチェフスキー『ロシア史講話』5、190-193頁；Семенова Л. Н. Быт и

## ロシア貴族の家庭教育

население Санкт-Петербурга (XVIII век). СПб., 1998. С.9.

- <sup>11</sup> アレクサンドルは、後のロシア・アカデミー初代総裁エカテリーナ・ダーシコヴァの実兄としても知られる (*Воронцов А. Р. Записки графа Александра Романовича Воронцова // Русский архив. 1883. Кн.1. Вып.2. С.231, 232*)。
- <sup>12</sup> Жильбер Ромм (1750-1795). К истории русской образованности нового времени // Русский архив. 1887. Кн.1. Вып.1. С.5-39. 名門クラーキン公爵家の出身である母親と、やはり「古い」貴族の家柄である父親との間に生まれた詩人 Ju.A. ネレディンスキイ=メレツキー (1751-1828) の事例でも、フランス語の基礎、正書法、算数、並びに年代記や古代史、地理、天文など教養科目を教授するという条件で、フランス人教師と契約書を交わしている (Ю. А. Недединский-Мелецкий. Очерки его жизни, бумаги и переписка // Русский архив. 1867. Кн.1. С.106, 107)。
- <sup>13</sup> Черты старинного дворянского быта. Воспоминания Марии Сергеевны Николевой // Русский архив. 1893. Кн.3. Вып.9. С.116. なお以下は、ロシア西部国境地帯のドイツ系貴族の事例であるが、母語以外の教育のためにフランス人を呼び寄せたという点で共通している。四等官の父親と「古い」貴族出身の母親の間にスモレンスクで生まれた陸軍少将レフ・N・エンゲリガルト (1766-1836) の回想によれば、1777年にレフの両親は長女ヴァルヴァーラのために、ヴィリニュスからフランス人マダム・ルヌヴェーを住み込みの家庭教師として、年 500 ルーブリで呼び寄せている。担当教科はフランス語だけで、この授業にはレフも同席している。レフ自身はこのほかに、ロシア人退役陸軍中尉から年 60 ルーブリでロシア語、算数、ドイツ語を教わっていた。その後レフは 12 歳 (1778 年) でスモレンスクのパンションに入学しているが、その授業料が年 100 ルーブリであったと記録している (*Энгельгардт Л. Н. Записки. М., 1997. С.17-19*)。
- <sup>14</sup> ロシア貴族の階層を分類する際、一般的には所有する男性農奴数が基準として利用される。E.N. マラシノヴァは最新の研究で、農奴 500 以上を上層、100-500 人を中心層、20-100 人を下層と区分している (*Марасинова Е. Н. Психология элиты российского дворянства последней трети XVIII века: По материалам переписки. М., 1999. С.10*)。また、ルーズヴェルトは、200 人以上を上層、80-200 人を中心層と位置づけ、80 人以下を所領経営のみでは生計を立てられない貧困層と判断している (*Roosevelt, Priscilla R. Life on the Russian Country Estate..., xiii*)。
- <sup>15</sup> Жизнь и приключения Андрея Болотова, описанные самим им для своих потомков, 1738-1795: В 3 т. М., 1931. Т.1. С.38-41. もっとも、教育以外の別の目的で雇用了した外国人を家庭教師としても用いる例もあった。1800 年 10 月 7 日、ハリコフの地主であった陸軍中佐 K とプロシア国民の庭師フリードリッヒ・ロットの間で契約が交わされた。それによると、まず冬季にはドイツ語の読み書きと算数の初級を教え、夏季には英国風の庭園をこしらえることが記されている。貴族らしい躾がなされるよう

### 小野寺歌子

に、家庭教師自ら手本となるような振る舞いが要求されている。報酬として、年 120 ルーブリの他、現物として食糧が支給された (Немец-педагог в России. 1800 г. // Русская старина. 1873. Т.7. С.858, 859)。

<sup>16</sup> Русские мемуары. М., 1988. С.133, 134. 同様の事例として、*Лопухин И. В.* Записки Сенатора И. В. Лопухина. М., 1990. С.1 を参照。1730 年代後半に砲兵学校に学んだ M.V. ダニーロフ (1722-90) によれば、砲兵学校でも、外国人教師が大変不足していたため、足枷をはめた囚人や殺人犯が教師として用いられていた (Записки М. В. Данилова // Русский архив. 1883. Кн.2. Вып.3. С.17)。

<sup>17</sup> *Михневич В. О.* Русская женщина XVIII столетия. М., 1895 (Репринт. изд. 1990). С.76, 77.

<sup>18</sup> Записки Московского мартиниста сенатора И. В. Лопухина // Русский архив. 1884. Кн.1. Вып.1. С.3. 国家による教育政策の展開は、—18世紀後半には学校教育の対象を女子にまで拡大するなどの進展をみせたのとは対照的に—家庭教育に関しては後れていた。確かに 1757 年、政府は科学アカデミーやモスクワ大学の教授に外国人家庭教師の資格試験を行うことを命じた法令を発布し、外国人家庭教師の管理・統制を強化した。この試験に合格し適任者と認定された者にのみ、パンションや貴族家庭で教える資格が与えられた。とはいえ、この法律の実効性には疑問がある。またこれに先立つ 1755 年にモスクワ大学が創設されたが、ロシア貴族史研究家 A.V. ロマノヴィチ＝スラヴァチンスキイは、家庭教師の低い水準が大学創設の一要因となったと指摘している (Очерки истории школы и педагогической мысли народов СССР. С. 48; Романович-Славатинский А. В. Дворянство в России. От начала XVIII века до отмены крепостного права. СПб., 1870. С.81)。

<sup>19</sup> *Lieven, Dominic.* The Aristocracy in Europe, 1815-1914. London, 1992. P.179.

<sup>20</sup> *Воронцов А. Р.* Записки графа Александра Романовича Воронцова. С.231, 232.

### Утако ОНОДЭРА

## **Домашнее образование русского дворянства и влияние иностранных воспитателей во второй половине XVIII века**

В XVIII веке были проведены реформы, европеизировавшие русское общество. В домашнем образовании русского дворянства важную историческую роль играли иностранные воспитатели — гувернеры и гувернантки.

Обратимся к ним для того, чтобы обрисовать культурно-исторический образ жизни русского дворянства во второй половине XVIII века.

В настоящее время можно найти много работ по истории школ и просвещения того

## ロシア貴族の家庭教育

времени, созданных в Японии и за рубежом. При этом исследователи уделяли главное внимание системе и мысли образования. Однако история домашнего образования русского дворянства не получила полной разработки. Постановка этой темы связана с поисками новых аспектов в изучении истории русского дворянства.

Цели исследования потребовали привлечения широкого круга источников: записок, воспоминаний, писем, документов и литературных произведений.

В первой главе рассматривается история дворянского образования XVIII века и процесс распространения домашнего образования в дворянской среде. «Табель о рангах» установил принцип государственной службы для русских дворян. Наряду с этим, образование было необходимым условием для привилегированного сословия. В то время был учрежден ряд специальных учебных заведений. Однако дворяне предпочитали давать образование детям не в школах, а дома посредством иностранных учителей в силу развивающегося европейского влияния.

Во второй главе исследуется контракт, заключенный между дворянами и иностранными воспитателями (в котором оговаривались предмет образования, срок преподавания, плата за преподавание и награждение), а также социальное происхождение гувернеров и гувернанток.

В третьей главе освещается особая роль иностранных учителей и их влияние на русскую дворянскую культуру. Во-первых, домашнее образование с помощью иностранных воспитателей дало возможность непосредственного соприкосновения русских дворян с европейской культурой. Во-вторых, изучение европейских языков имело значение для познания дворянами своей родной культуры. Тем не менее в литературных произведениях второй половины XVIII века появился типичный образ гувернера и гувернантки, имеющий иронический характер. Это указывало не только на невежество иностранных учителей, но и на культурную незрелость русских дворян.

В заключении следует отметить, что европейский культурный опыт, переданный иностранными учителями, оказал влияние на развитие русского государства и расцвет русской дворянской культуры.